

研究ノート(利用者の声)

卒業制作と工作センター

芸術学系 蓮 見 孝

芸術専門学群11コースの一つである生産デザインコースは、わたしたちの身近にある器具や工業製品、また情報機器のデザインなどを扱う分野で、1学年に10~15人程度の学生が学んでいる。

年末年始のうめき声

卒業研究では論文と制作の両方が課されるが、9月の論文仮提出を終えて作品制作が佳境に入る晩秋から年明けにかけては、毎年4年生たちの“うめき声”があちこちから聞こえてくる。その理由には、大きく分けて2つある。まず、テーマが全く自由であるが故に、なにをしたらいいか、構想がまとまらなくて悩むということ。これは対象領域の多様性を特徴とする生産デザインならではのこともかもしれない。2つ目は、どのようにつくっていいかわからないで苦しむということ。なぜなら学生たちは、“つくりやすいものでお茶を濁す”という悪知恵も思いつかないほど、実践的なデザイン・設計経験が不足しているからである。そこで教官は、向こう見ずな学生たちが考えてきた奇想天外かつ実現不可能そうなテーマ発表を聞きながら、「ま、いいんじゃないの」と、あえて意地の悪い笑顔でゴーサインをだす。それから先の苦勞が、デザイナーとしての自立性を涵養するために、どうしても学生が一人だけで越えなければならない峠だと思ってしまうからである。

こうして悩みはじめた学生たちは、いろいろな生態を示しはじめる。ピタッと動きがとまって無言になってしまう者、簡易な模型で済むように徐々にデザインを変更しだす者、相変わらず実現困難そうなアイデアにしがみつくる者、などなど。

昨年のしがみつiki派の一人に石原祐一君がいた。ガラスの照明器具を制作したい、しかも卒業論文のテーマである「際(きわ)のデザイン」の概念をかたちにした実寸・実動のものを、という欲張りなデザインである。ガラスは学生が簡単に扱える素材ではないので、そのうち諦めてテーマ変更かな、と思っていたら、どうしても製作したいと言う。「それならガラスは外注だぞ。現場の掟は厳しいぞ、きちっとした図面を描かないとつくってもらえないぞ。いくらかかるかわからないぞ!」と、たて続けにプレッシャーをかけてみても動じないので、どうやら本気らしいと思いはじめ、何とかサポートしてやりたいという気になった。

9年前の驚愕

私は10年前の1991年に、民間の自動車会社から筑波大学に転職した。会社ではデザイン部のモデル課長なども経験していたから、どちらかという現場志向の制作系にも近い道を歩んできた。大学にきて初めての年に、卒制でスピーカーのデザインをした学生がいて、その部品のフラスコなどを工作

センターでつくっていただいたことがあった。その時、大学の構内にこんなにすばらしい工作ユニットがあるのかと驚愕したことを思い出して、とらえず彼に工作センターを訪ねるようにアドバイスしてみた。

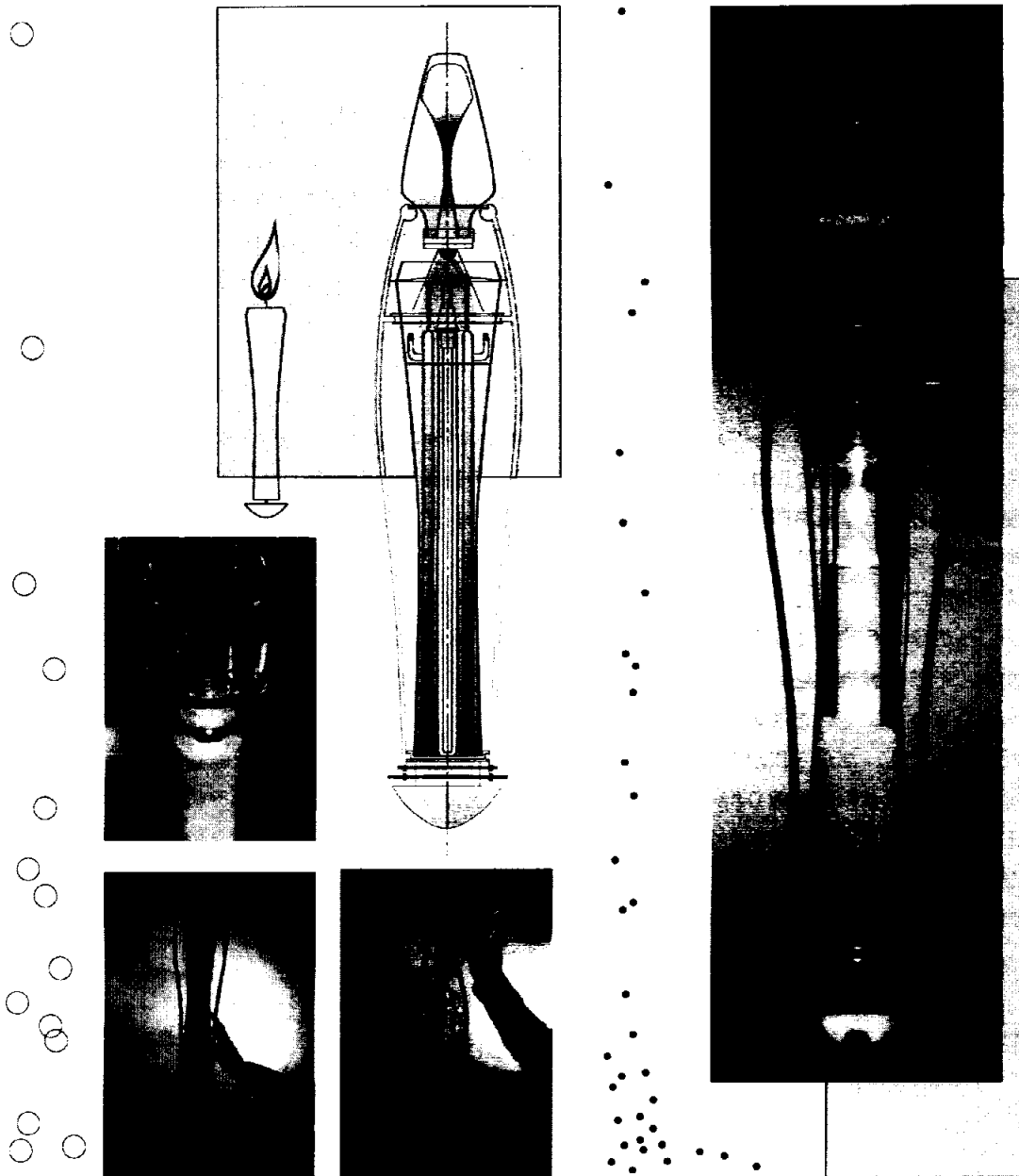
帰ってきた彼はしょげていた。「なんか対応が冷たい。ダメみたい…」というような弱気なつぶやきを漏らしたように記憶している。それでもその後の彼のしぶとさはかなりのものだったようだ。通いつめて、いつの間にか“あうんの呼吸”の人間関係をつくりだしたようだ。おそらく工作センターのみなさんには、言い難いご迷惑をおかけしたはずだが、幸い研究室に苦情は来なかった。ただゼミの度に、彼がうれしそうに工作センターの日々の報告をした顔が思い出される。魂を込めた“モノ（作品）”とともに得ることができた“モノがたり（プロセス）”は、何ものにも換え難い大学生活の貴重な思い出になったに違いない。

芸術賞の受賞

このように工作センターのご協力で完成した作品「流れるあかり、たまる光（Streaming Light, Accumulated Lamp）」は、2月22～27日にアルス美術館で行われた卒業制作展（後期）に展示され、優秀作品として芸術専門学群長賞を受賞した。また、デザイン専門誌である「Design News 250号」や「日経デザイン2000年7月号」などにも掲載された。とくに「Design News 250号」では石原本人が対談に参加し、工作センターへの感謝の気持ちを次のように述べている。

「…大学の施設で工作センターというのがあって、ふだんは理系の実験器具を作っているところですが、そこに設計図を持ち込んで作ってもらいました。工場に毎日通って、技術屋さんと相談しながらやりました。そのときの作品の全体像、コンセプト、概念、発想、到達点が頭に入っているのは僕だけなんです。だから僕があちちに行って説明し、こっちに行って説明したりしながら、いろいろな専門家や技術者の間を取り持つてつないでいかないとカタチにならない。そういう意味で、デザインというのは人と人のかかわりを作ったり、つないだりするようなことかなと思って、すごい勉強になったんです。今度就職して、企業デザイナーになると考え方が変わるかも知れませんが、卒業製作のなかでそういうことに気づいたのは大きな財産だと思います…」

キャンパス内のネットワークで、優れた作品が生み出されたことは、指導教官としても、この上ない喜びである。本誌に寄稿させていただいたお礼も含め、関係のみなさまに心からお礼申し上げます。



スイッチONでポンとつく安易な照明器具ではなく、人が所作を行うことによって“コトの美”を生み出す新しいあかりの提案である。弁を静かに開くと、仄かな光をたえたガラスの微粒がサラサラと落ち積もり、やがて光度を弱めて闇に同化していく。間（ま）の豊かさに満ちた時空間の流れが、感性的で美しい。